

『青春ゲシユタルト崩壊』を読んで

弘前市立南中学校

三戸 愛 瑠

「青年期失顔症」という初めて聞く言葉。青年期に個性を殺し、自分を見失うことが強いストレスになると発症するらしい。自分自身の顔が認識できなくなり、のっぺらぼうのように見える。これは作者の架空の症状らしいが、とても興味がわき、読んでみることにした。

主人公は朝葉という高校生だ。勉強も部活も要領よくこなす優等生だが、部員の仲を取りもつ日々を過ごすうちに本音を飲みこむことに慣れ、自分の意見を見失ってしまった。そんなある日、朝葉は「青年期失顔症」になってしまふ。それを知った同級生の聖は、

「疲れたら休んでもいいんじゃないの。」

と言って、朝葉を学校から連れ出してくれた。聖のおかげで笑顔を取り戻した朝葉が、自分が本当にやりたいことや好きなことを見つけたという物語だ。

この話の中で心に残った場面が二つある。まずは、朝葉が悩んでいるときに聖が学校から昔懐かしい駄菓子屋へ連れ出

したところだ。小学生の頃の二人の記憶を語り合ったことで朝葉は気分転換ができ、気が楽になったのではないかと思った。ずっと同じところに留まらずに違うことを試してみることで、気分がリセットされると考える。

次に、朝葉の後輩の中条さんと、保健室の叶ちゃん先生の案で「青失部」を立ち上げようとしているところだ。中条さんも朝葉と同じ青年期失顔症で、青年期失顔症に関する悩み相談が出来る部活をつくろうとしていたが、苦痛だった部活をやつとやめられた朝葉にとつて、別の部活への入部は気が進まないだろうと聖が心配した。でも朝葉は、

「自分みたいに発症して悩んでいる人の力になれるならやってみたいなつて思う。それに青年期失顔症をもつとよく理解するために勉強してみたい。」

と、今までの朝葉なら考えられないほど前向きで真つ直ぐな発言をした。それは朝葉の心情が変化した証拠だと思つた。きっかけは聖や叶ちゃん先生だったが、朝葉が自分の意思で

行動できるようになったのは、紛れもなく朝葉自身のおかげである。

学生である私たちは、学校という狭い水槽の中で流れるように泳ぎ続けている。でも、学校というのは人生の一部にしか過ぎない。世界はもつと広いことを考えると気が軽くなるのではないか。私も、時々この狭い水槽から早く出て、広い世界に行きたいと考える。友達がいらないとんだか心細い。でも、気を遣って疲れることもある。本音を言うのはなかなか緊張するけど、飲みこんでばかりだと自分が自分でなくなってしまうような気もする。どうしたらいいんだろう。みんなどうまくやっていききたいけど、本当にみんなどうまくやっていく必要があるのか。悩む。

この物語を読んで少しわかったのは、自分の意思で行動することの大切さだ。そして、まちがうかもしれないけど、一歩前に踏み出す勇気の大切さだ。他人がどう思うかにばかり気を取られずに、自分がどうしたいかを忘れないことだ。そして、それをちゃんと伝えられるようにすることだ。

きつと自分と同じように、悩んだり立ち止まったりしている人はまわりにたくさんいるはずだ。朝葉はまわりの人たちの力を借りて、自分の意思で行動できるようになった。私も、助け、助けられながら、自分を見失わないように生きていきたい。この夏、この『青春ゲシユタルト崩壊』から学んだことを忘れないようにしていきたい。